

横山涼「YOKOYAMA'BOX 饒舌な秘密」 Contemporary Art Brut vol.5

2011/11/03(thu) - 11/20(sun)

箱についての話。ギリシャの神ゼウスがパンドラに与えた箱には、あらゆる禍が封じ込められていた。好奇心に満ちたパンドラは禁を破って蓋を開け、人間界に不幸が飛び出した。パンドラが慌てて蓋を閉じたため、箱の底に希望だけが残ったという。現代美術家の河口龍生の《DARK BOX》は、太いボルトで封印された重厚な鉄の箱だ。「闇の箱」の題名通り、箱の封印は暗黒の中で行われる。ある日ある時の闇が、そこには閉じ込められている。

箱は何かを閉じ込める。パンドラの箱に閉じ込められた希望、《DARK BOX》に封印された闇を想像してみる。パンドラが箱を閉じた瞬間、希望は漆黒の闇に包まれただろう。もはや闇の向こう側、仕切りを隔てた箱の外側に光があることすら、希望には思い描けまい。《DARK BOX》のボルトが外された途端、内部の闇は消滅する。再び暗闇の中で箱を閉じても、そこに閉じ込められるのは別の闇だ。箱は何かを閉じ込めるだけでなく、特定の空間を切り取る機能も果たす。仕切り1枚を隔てるだけで、内側と外側の世界は何と異なることか、希望にとって、暗闇にとって。箱はつまり、その大小に関わらず、無限の空間と時間を生み出す装置でもあるのだ。

改めて、横山涼の箱を眺めてみる。闇を閉じ込めるほどの気密性はないようだ。外壁には「Death」という書き込みや骸骨のイメージもあるから、中に希望が鎮座しているとも考え難い。では字義どおり死や禍がパンドラの箱よろしく封じ込まれているのだろうか。いや、狡猾な死や禍なら、この箱のわずかな隙間からでも人間界にはみ出してくるに違いない。しかし、どの箱にも不釣り合いほど頑丈な鍵と蝶番が付き、箱を補強する板や木片が、ボルトやビスで執拗に打ち付けられている。であれば、何かとんでもないものが中に潜んでいるのかもしれない。少なくとも、彼がこの箱のことを考え、制作に没頭した濃密な時間と熱量が閉じ込められていることだけは間違いない。再び、箱の中の熱と時間を想像してみる。それは確かにとんでもないことだ。なぜなら、果てしない時間と空間の広がり横山と共有できるかもしれないのだから。 服部正(兵庫県立美術館)





アトリエでの木工は自分が作りたいものを形にする事が大切になっている。何を作るのかは自分次第。使う材料、道具、色だって自由に選べる。横山君は最初、「自分が日頃使いたいものを作りたい」と言った。小物を入れるBOXやCDラックが作りたいと、アトリエにある材料を使い、家から持ってきた道具や素材を使いBOXを組み立てていった。鉄板を貼り付けたり、ハリネズミのように釘でトゲトゲにしていたり、髑髏のイラストがあったり、小さめのBOXに南京錠が何個もついていたりする。それはそれは大切なものが入ってるに違いないと思った。当時は何を入れているのかをなかなか教えてはくれなかった。横山君の大好きなものといえば、辛い食べ物(自宅で唐辛子を栽培しているほど)、クリスマスソングのCD、ポケモン、昆虫、金魚、電動工具、近所で拾ってきた大きな電動モーターなどが思い浮かぶ。横山君と出会った頃は、とにかく作品と一緒にトゲトゲしく近寄り難い存在だと感じた。しかし、実際に仕事を通して話しをしていくうちに実はそうではなく、とても恥ずかしがり屋で素直になれない青年であ

ることを知った。こんなことを書くとたぶん横山君は「俺はそんなんじゃない！」と中指を立てて言うだろう。「俺は強い」「悪が正義だ」というところは今も変わっていないが、「力仕事は俺に任せろ」と男気を感じるカッコいいところもあり、『ありがとう』と言うとハニカムようになった。

作品はダークな部分は顕在で「稲妻」「龍」「血」「魔の鋼」などタイトルを決めて、形も角、牙、爪など鋭い部分があり、色も毒々しい色合いに染まり、作品の完成度も高まっている。まさに横山君らしい迫力ある作品が誕生している。そして今も尽きることなく次々と新しい作品のイメージが無限大に広がっている。

(アトリエスタッフ)

後日談

来廊した横山涼は、「悪は正義だ」と、まるで伝説のスタンダップコメディアン、レニー・ブルースのようにしきりに口走っていましたが、ピュアな表情とは裏腹な、ちょっとしたその色悪ぶりには久し振りにシビレました。病院の中にいるような管理された日本で、このような暴言？を吐けるアーティストは何人いるのでしょうか。レニー・ブルースがスラングや差別用語を吐き続けることによって、アメリカのどれだけの人種や言葉そのものが自由な権利を勝ち得たかは、簡単に言い表せるものではありませんが、それは運動というほどの生易しさではなかったことは確かなはずです。

横山のつくった、釘やネジが内側から外側へと外界に対して悪意をもって突き出させたさまを初めて見た時、これはスタンリー・キューブリックの『時計じかけのオレンジ』だなと直感しました。凄まじい暴力の連鎖の果てに行き着くところは、国家がコントロールし続けた謀略だったというお話です。

真綿でやんわりと締め上げられたように日々の生活のレールが敷かれる中、横山のつくる箱はレニー・ブルースほどの大きな旗を振ることもなく、静かに力強く奥底から絞り出されたように存在しています。それと同時に、孤独に一人で目に見えないものと戦う姿は、我々の知性という名のもとのチツポケな文脈を破壊し、蘇生させてくれるエネルギーをも内包しています。

横山の箱を見たある女性は「なでなでしてやりたくくなりますね」とつぶやきました。そのつぶやきは母性の力や情の深さから出たものかもしれませんが、その瞬間の YOKOYAMA'BOX と女性の間には、「おおもとのアート」に触れ合ったという関係性が生まれていました。

(SEKKA)

協力: 兵庫県立美術館学芸員 服部正

後援: 文京区(文京アカデミー推進部)